

ダニエル書 - 第百八十九番

パニウムの戦いの預言的なタペストリー：日曜法への序章

Jeff Pippenger

2024-04-19

パニウムの戦いは、本質的には霊的な戦いであった。日曜法の直前に、1989年の終わりの時におけるロナルド・レーガン以降7人目（5人目）でもあり、最後の共和党大統領で、史上最も裕福で、さらにグローバリズムの領域全体をかき乱す者である第八の大統領が、背教的なプロテスタント勢力を率いて、グローバリズムの「ウォーク主義」に当たるギリシャの神パンの宗教を打ち破る。11節と12節では、2014年のウクライナ戦争に始まる歴史が、16節の日曜法で完結する。15節はパニウムの戦いであり、パニウムの戦いは、すなわち第三次世界大戦であるアクティウムの戦いへとつながる。

第16節にある「日曜法」としての「大地震」の時に、第三の災いのイスラムがアメリカ合衆国を攻撃し、諸国を怒らせ、国家的破滅をもたらす。その攻撃に先立つのはパニウムの戦いである。日曜法の時に、竜と獣と偽預言者の三重の連合が確立される。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けるとき、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

その時点で、教皇権の致命的な傷は完全に癒え、彼女はついに誰も助ける者のないままその終わりに至るまで、絶対的な支配を行う。ローマが第三の障害を征服したときにこそ彼女は支配権を握るのであり、そのことはダニエル書8章9節および11章16節から19節における異教ローマによって示されている。教皇ローマが三本の角を取り除いたとき、彼女は1260年間にわたり絶対的な支配を行った。同様に、紀元前31年のアクティウムの海戦で第三の障害であったエジプトを征服すると、異教ローマも360年間にわたり絶対的な支配を行った。

文法では、接尾辞「-ium」は語の末尾に付けて、場所、状態、または何かの集合を表す名詞を作る。これは、特に化学や生物学において、技術用語や科学用語の形成に広く用いられる。例えば、「スタジアム」は競技やその他のイベントのための場所を指し、「アクアリウム」は水生の生物や植物を展示のために飼育・栽培する場所を指し、「ジムナジウム」は身体的な運動や訓練のための場所を指す。科学用語では、「-ium」はしばしば化学元素や化合物を示すために用いられ、とりわけその元素や化合物が単離されたり発見されたときに用いられる。例えば、「ナトリウム」は記号Naの化学元素を指し、「カルシウム」は記号Caの化学元素を指す。

異教ローマの絶対的支配の始まりはアクティウムの海戦において成し遂げられ、パニウムの戦いは、アクティウムによって象徴される戦争への扉を開いた。というのも、「行に次ぐ行」の原則によれば、アクティウムは、教皇制が再び世界を絶対的に支配する時の日曜法を表しているからである。

アクティウムは海戦であり、パニウムは陸戦であった。ゆえに、この二つの戦いの結び付きは、陸と海を包含する世界規模の戦いを表している。古代史において最も有名な海戦であるアクティウムは、また世界的な戦争も表している。というのも、「あなたが見た水、淫婦の座しているところは、民、群衆、国々、諸言語である」からである。パニウムは、間もなく到来する日曜法の際に政治的な戦いと結び合わされる霊的な戦いを表している。

名詞としての「pan」という語は、文脈によって複数の意味を持つが、ギリシャ神話においては、パンは羊飼いと羊の群れ、牧歌的な音楽、荒野の神である。彼はしばしば半人半ヤギの姿で描かれ、音楽と自然を愛すること知られている。

大いなる欺きの劇の頂点として、サタン自らがキリストに成りすます。教会は久しく、救い主の再臨こそがその希望の成就であると公言してきた。今やこの大いなる欺き手は、キリストが来られたかのように見せかけるであろう。地のさまざまな場所で、サタンは人々の間に、まばゆい光を放つ威厳ある存在として現れ、ヨハネが『黙示録』で記した神の御子の描写に似た姿を取る。ヨハネの黙示録 1章13-15節。大いなる争闘、624。

パンは羊飼いの神であり、真の牧者を装って現れるだろう。サタンがキリストを装うのは日曜法の時に始まる。なぜなら、「その布告」の時に、私たちはそのときサタンの驚くべき働きの時が来ており、終わりが近いことを知ることができるからだ。

「pan」という語は、揚げたり焼いたりなどの調理に用いられる、浅くて縁の広い調理用の器（鍋）を指すこともある。最後の戦いは、旗印として高く掲げられる聖なる山である霊的エルサレム、すなわち、なおバビロンにいる神のもう一つの群れが逃れて行くその山を中心に展開する。その時、すべての国々が霊的エルサレムに攻め寄せるが、霊的エルサレムは「杯」（pan）とされている。

イスラエルについての主の言葉の託宣。天を張り、地の基を据え、人のうちに人の霊を形づくる主はこう言われる。見よ、わたしは、彼らがユダをもエルサレムをも包囲する時、エルサレムをその周囲のすべての民にとってよろめきの杯とする。その日には、わたしはエルサレムをすべての民にとって重い石とする。これを持ち上げる者は皆、ひどく傷つけられる。たとい地のすべての民がこれに向かって集まるとも。ゼカリヤ書 12:1-3。

エルサレムは大釜でもある。というのも、ドラマが展開される鍋だからだ。「大釜」とは料理用の鍋のことである。

そのとき彼は私に言った、「人の子よ、この町で悪事をたくらみ、邪悪な助言を与えているのはこの者たちだ。彼らはこう言っている、『それは近くない。さあ家を建てよう。この町は釜、われらは肉だ。』それゆえ彼らに向かって預言せよ。預言せよ、人の子よ。」すると主の霊が私の上に臨み、私に言われた、「語れ。主はこう言われる。イ

スラエルの家よ、あなたがたはこう言った。わたしはあなたがたの心に上ることを一つ残らず知っている。あなたがたはこの町で殺した者を増やし、その通りを殺された者たちで満たした。それゆえ、主なる神はこう言われる。あなたがたがその中に横たえたあなたがたの殺された者こそ肉であり、この町こそ釜である。だが、わたしはあなたがたをその中から引き出す。あなたがたは剣を恐れた。ゆえに、わたしはあなたがたの上に剣を来させる、と主なる神は言われる。わたしはあなたがたをその中から連れ出し、異邦人の手に渡し、あなたがたの間に裁きを行う。あなたがたは剣に倒れる。わたしはイスラエルの境であなたがたをさばく。こうしてあなたがたは、わたしが主であることを知る。この町はあなたがたの釜とはならず、あなたがたもその中の肉とはならない。むしろ、わたしはイスラエルの境であなたがたをさばく。そしてあなたがたは、わたしが主であることを知る。あなたがたはわたしのために歩まず、わたしの裁きを行わず、むしろ周囲の異邦人のならわしに従ってきたからである。」
エゼキエル書 11:2-12.

英語では、接頭辞「pan」は「普遍的」「すべての」「横断的」といった意味を持つ。例えば、「panorama」はある領域の広範で包括的な眺めを指し、「pantheism」は宇宙が神聖であるという信仰を指し、「Pan-American」はアメリカ大陸のすべての国々に関わる事柄を指す。したがって、「pan」は世界規模の戦争を表す。

サタンは、重要でない問いで人々の心を逸らし、きわめて重要な事柄を明確にはっきりと見えないようにしている。敵は世界を罠にかけようと企んでいる。

いわゆるキリスト教世界は、重大かつ決定的な行動の舞台となる。権力の座にある者たちは、ローマ教皇制の例に倣って、良心を支配する法律を制定するだろう。バビロンは、その淫行の怒りのぶどう酒をすべての国々に飲ませるだろう。あらゆる国が関与することになる。『選ばれたメッセージ』第3巻、392頁。

名詞としての「act」という語は、「立法機関が制定する正式な書面による決定または法令」を意味する。

わが国が日曜法を制定するほどにその政府の原則を放棄するとき、プロテスタント主義はこの行為においてローマ教と手を結ぶであろう。『証言』第5巻、712頁。

いわゆるキリスト教世界は、偉大な行為、すなわち「act」が繰り広げられる舞台であり、すべての国（pan）が関与することになる。「act」という語は、戯曲、映画、その他の上演における一幕や区分を指すこともあり、通常、特定の出来事や行為のまとまりによって特徴づけられる。動詞としての「act」は、特定の行為を行うこと、またはある仕方振舞うことを意味する。また、戯曲や映画で演技するように、ふりをすることや役を演じることも指す。

世界は舞台である。その役者たち、すなわちその住人は、最後の大いなる劇で自らの役を演じる準備をしている。神は人々の視界から消えている。人類の大多数においては、利己的な目的を達成するために人々が結託する場合を除いて、何の一致もない。神は見えておられる。反逆する者たちに関する神の御旨は必ず成就する。神が混乱と無秩序の諸要素にしばしの間、支配を振るわせることをお許しになっているとしても、この世界は人間の手に渡されたのではない。地の底からの力が、劇の最後の大いなる場面

を引き起こそうとして働いている。すなわち、サタンがキリストとして現れ、秘密結社で互いに結束している者たちのうちに、不義のあらゆる欺きとともに働くのである。結託への情熱に身を委ねている者たちは、敵の計画を実行している。原因には結果が伴う。

「不法はほとんど極みに達した。混乱が世界を満たし、間もなく大いなる恐怖が人類に臨もうとしている。終わりは非常に近い。真理を知る私たちは、間もなく世界に圧倒的な驚きとして突然押し寄せる事態に備えるべきである。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年9月10日。

パニウムとアクティウムは第三次世界大戦を表している。その戦争では、ギリシャの山羊神パンに象徴されるような超自然的な現象が起こるだろう。その戦争は、「act」としての日曜法の施行と結びつけられる。そしてその戦争は「大いなるドラマの最後の場面」として位置づけられている。というのも、それは日曜立法の施行という法的行為であるだけでなく、人類の猶予期間の終わりの時における福音のドラマの頂点でもあるからである。パニウムとアクティウムが預言的に結びつく戦いに先立ち、ダニエル書11章16節において、神の終末の軍勢はすでに興されており、その旗、すなわち「ensign」がそのとき掲げられる。「ensign」の本来の意味は、軍隊の旗である。

Act と Pan はアクティウムとパニオンであり、驚くべき言語学者は両方の戦いの地理、名称、歴史を支配した。なぜなら、それがまもなく到来する日曜法の直前の歴史だからである。パニオンの戦いは紀元前200年に起こり、第16節はローマが紀元前63年にエルサレムを征服したことを示している。

紀元前200年から紀元前63年に対応する終末時代の歴史の中で、紀元前161年から紀元前158年の歴史が示すように、アメリカ合衆国における獣の像の形成が成就する。アメリカ合衆国で獣の像を築く最終局面の時期に先立って、紀元前167年のモデインの反乱によって表される出来事が起こる。その反乱は、強制されたギリシャの宗教に対する反乱を型としており、その反乱はさらに、紀元前164年の神殿の再奉献によって示される道標へと至る。

ユダヤ教では、聖なる油一日分が八日間持続したという奇跡のために、紀元前164年が記念されている。したがって、紀元前161年に先立つ紀元前164年は、背教した神の民のために成し遂げられたサタンの奇跡を指し示している。その奇跡は、一日が八日を生み出したものとして表され、最初の一日の油が八日間すべてを支えた。その奇跡は、七つのうちの一つの部分にもたらされ、そしてこの道標は、背教した共和派の角と背教したプロテスタントの角の双方において「七に属する第八」という謎が成就している、まさにその歴史の中に据えられている。

まもなく到来する日曜法の前に起こるサタンの奇跡の現れは、ギリシャの神パンに関連づけられている。パニウムの戦いがトランプと背教的プロテスタンティズムによって戦われ、彼らが勝利を収めるとき、「パンドラの箱」は開けられてしまい、そのとき人類に解き放たれる諸問題を解決する術はなくなるだろう。というのも、「まもなく大いなる恐怖が人類に臨もうとしている。終わりは非常に近い。真理を知る私たちは、まもなく圧倒的な不意打ちとして世界に降りかかる出来事に備えるべきである。」からである。

十四万四千人とは、イエス・キリストの啓示の封印が解かれることによって与えられた神の御言葉の聖化の力によって印を押された者たちである。その啓示にはいくつかの具体的な真理の筋道が含まれており、イエスとは誰であるかについての聖化された教えを与える。神のことばとして、彼はバベルの塔において混乱を降らせ、御力によって諸言語を生じさせたとき以来、人類のすべての言語を治めてこられた、不思議な言語学者である。彼はまた、御言葉に示された数や創造全体のうちに数をもって秘義を隠しておられる、不思議な数え手である。彼は歴史の支配者である。というのも、歴史は“His (彼の) -story”だからである。彼は地を創造し、大洪水の後に地球の地形を御手で定められた。それゆえ、御言葉に見いだされる「真理」を構成している種々の預言的地理もまた、彼によって定められたのである。十四万四千人は、ほかのことのほかに、彼が万物を創造されたことを信仰によって示す者たちを表している。

初めに、ことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった。この方は初めに神と共におられた。万物はこの方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。ヨハネによる福音書 1:1-3.

パンドラの箱の物語は、古代ギリシアの神話である。これは主に、ギリシアの詩人ヘシオドスの『Works and Days』や、その他さまざまな古典資料で語られている。これは明らかに、エデンの園におけるイヴの経験の言い換えである。「パンドラ」という名は古代ギリシア神話に由来する。ギリシア語の「pan」（すべて）と「dora」（贈り物）に由来する。パンドラは「すべての贈り物を与えられた」という意味である。イヴは教会の象徴であり、すべての贈り物は神の教会のうちに見いだされる。

ギリシア神話では、パンドラは神々によって創造された最初の人間の女性である。神話によれば、彼女は神々の王ゼウスの命を受けたヘーパイストスによって作られ、人類を罰する計画の一環だった。神々はそれぞれパンドラに、美しさ、優雅さ、知性、魅力などの贈り物を授けた。ゼウスは彼女に壺（後の伝承では箱）を与え、いかなる状況でも決してそれを開けないよう命じた。エバは、「園の中央にある木」を除くあらゆる木から食べてもよいと告げられていた。

好奇心に駆られたパンドラは、やがて誘惑に屈して壺を開けてしまった。すると、それまで中に閉じ込められていたあらゆる悪、苦痛、病気が世界へと放たれ、人類の間に苦しみと不幸が広がった。しかし、壺の中には一つだけ残っていたものがあつた。希望である。神話のある伝承では、パンドラはすぐに壺を閉じて希望が逃げ出すのを防いだとされるが、別の伝承では希望もまた外へ現れ、逆境に直面する人類にかすかな樂觀と回復力をもたらしたとされる。

パニウムの戦いは、まもなく来る日曜令においてアクティウムの海戦と結び付く。そして、そのまもなく来る日曜令は、エデンの園での試験によって型として示されていた。園ではその試験は単にアダムとエバに対するものだったが、終わりの時代には、その試験は全世界のすべての人類に突きつけられなければならなかった。園での、神の言葉を信じるか否かという最初の試験は、日曜令という最後の試験の型である。エバはその最初の試験に失敗し、パンドラの神話に表れているように、人類に惨禍の扉を開いてしまった。

パニウムの戦いがアクティウムの海戦と結びつくとき、エデンの園で象徴された試練が全人類に及ぶ。そのとき世界に与えられる希望とは、全世界（パノラマ）が目にするように掲げられる旗印である。

全世界の住民よ、地に住む者よ、彼が山々の上に旗印を掲げるときには見よ、彼がラッパを吹き鳴らすときには聞け。イザヤ書18章3節

次回の記事でこの研究を続けます。

世界は劇場である。その役者である住民たちは、最後の大いなるドラマでそれぞれの役を演じる準備をしている。人類の大多数の間には、人々が利己的な目的を果たすために結託するとき以外、一致はない。神は見ておられる。背く者たちに対する神のご計画は必ず成就する。神がしばらくのあいだ混乱と無秩序の要素が支配するのをお許しになっていても、世界は人間の手に委ねられてはいない。下からの力が、ドラマの最後の大いなる場面を引き起こそうとして働いている。すなわち、サタンがキリストを装って現れ、秘密結社で互いに結び合っている者たちのうちにおいて、不義のあらゆる欺きによって働くのである。結託への情熱に身を委ねる者たちは、敵の計画を実行している。原因には結果が伴う。

今日ほどこのメッセージが強く当てはまる時はかつてなかった。世界はますます神の要求をないがしろにしている。人々は背きにおいて大胆になっている。世に住む者たちの邪悪は、その不義の分量をほとんど満たしてしまった。この地は、神が破壊者に、この地に対してその思うがままに働くことをお許しになる段階に、ほとんど至っている。神の律法の代わりに人間の法を据え、ただ人間の権威によって聖書の安息日に代えて日曜日を高く掲げることは、終幕の出来事である。この置き換えが普遍的になったとき、神はご自身を現される。神はその威厳をもって立ち上がり、地を激しく揺り動かされる。神はその御ところから出て、世の住民をその不義のゆえに罰せられる。地はその血をあらわにし、もはや殺された者たちを覆い隠さない。

私たちは、諸時代の危機の瀬戸際に立っている。神の裁きは立て続けに次々と下る一火、洪水、地震、そして戦争と流血である。私たちは、この時代には、重大にして決定的な出来事が起こっても驚いてはならない。なぜなら、慈悲の天使は、悔い改めない者を守るために、もはや長くとはどまっていることができないからである。

危機は徐々に私たちに忍び寄っている。太陽は天に輝き、いつもの巡りを続け、天はなおも神の栄光を告げている。人々は依然として飲み食いし、植え、建て、めとり嫁がせている。商人たちは相変わらず売り買いをしている。人々は互いに押し合い、最も高い地位を争っている。享楽を愛する者たちは今もなお、劇場や競馬場、賭博場に群がっている。興奮は最高潮に達しているが、猶予の時は急速に閉じつつあり、すべての人の永遠の運命がまさに決せられようとしている。サタンは自分の時が残り少ないことを知っている。彼は、猶予の時間が終わり、あわれみの門が永遠に閉ざされるその日まで、人々を欺き、惑わせ、忙しくさせ、心を奪うため、あらゆる手先を総動員している。

不法はほとんど極みに達しようとしている。混乱が世界を満たし、やがて大いなる恐怖が人類に臨もうとしている。終わりは非常に近い。真理を知る私たちは、間もなく世界を圧倒的な驚愕に包む不意の出来事に備えるべきである。

不義がはびこるこの時代、私たちは最後の大いなる危機が目前に迫っていることを知ることができる。神の律法への公然たる反抗がほとんど世界中に広がり、神の民が同胞によって圧迫され苦しめられるとき、主は介入される。

私たちは重大で厳粛な出来事のとば口に立っている。預言は成就しつつある。不思議にして波瀾に富む歴史が天の書物に記されつつある。私たちの世界のすべてが動揺している。戦争と戦争のうわさがある。諸国民は怒り、死者がさばきを受ける時が来た。出来事は移り変わり、速やかに近づく神の日の到来へと向かっている。いわば、残されているのはわずかな時だけである。しかし、すでに国は国に、王国は王国に対して立ち上がっているが、今はまだ全面的な交戦には至っていない。なお四方の風は、神のしもべたちが額に印を受けるまで、押さえられている。そのとき、地上の諸権力は最後の大いなる戦いのために軍勢を結集するだろう。Christian Service, 50, 51.